

# 木沢村の伝説

史学班 (徳島史学会)

西田 素康\*<sup>1</sup> 湯浅 安夫\*<sup>2</sup>

## 1. 木沢村伝説の背景

木沢村は那賀川の水源地帯で剣山東方に位置し、西は剣山を背にして三好郡東祖谷山に、北は美馬郡木屋平村、名西郡神山町、勝浦郡上勝町に接する。剣山山系を源とする那賀川支流の坂州木頭川が流れ、それに沢谷川などの小さい谷川が流れ込み、その沿岸に集落が発達している。県の「市町村別主要統計」によれば、村の面積は県下市町村の十番目の広さであるが、人口は最少の典型的な過疎地の山村である。

その開発の歴史は古いようで、下流の隣町の上那賀町に縄文遺跡である「古屋岩陰遺跡」があることより、その時代から人類が住み着いていたことが想

像される。阿波国が粟の国と長の国に分かれていた時代は長の国に属し、長の国には八郷（1郷は50戸）があり、そのうちの「山代郷」に属していた。坂州の宇奈為神社は延喜5年（905）より調査した「延喜神名式」に式内社の1つとして記載されているところから、相当古くから集落が発達していたことが偲ばれる。中世では、紀州の熊野より木頭の湯浅氏が入部し、源平抗争の時は源義経に味方して勢力をのぼし、仁宇城に拠って活躍し、細川持常に仕え、仁宇谷の歴史は湯浅家と共にあると言われるほどで、藩政時代は政所として政治に関わっている。

以上、木沢村の位置から地形・歴史の概略であるが、それらを背景として木沢村には多くの伝説が語り伝えられている。

## 2. 木沢村の伝説の分類と一覧表 (表1)

平家伝説 (12)	大用知の落人・鎗かけと平家平・西山家の開けずの偃・岩倉部落の起源・掛盤のいわれ・一本杉・川成部落の開祖・七人塚・とち業の怪異・ウツゲの谷・羽平の始まり・井堀の上の山の神
人物に関するもの (4)	高野と高野山・小泉と岩かけ大師・早撃ちの名人韋駄天男・おとめ墓
動物に関するもの (6)	へび滝・熊の手・おわえてくるツチノコ・キツネの足跡・十二社の鳥・自家発電を止めた大ウナギ
木や石に関するもの (7)	くれ石・黒滝寺の灯明・ごうらい石・子持ち石・かずらぶち・十二社の灯明杉・十二社の力石
社寺・神仏に関するもの (17)	カリバ明神・歴史の古い宇奈為神社・宇奈為神社の七不思議・木頭名の五輪塔・黒滝寺と弘法大師・弘法大師堂・宮の窪の倭武神社・是清八幡・谷櫃のお太師さん・ヲレ合さん・じぞう橋のいわれ・川成八幡社の神像・大用知の氏仏堂・出羽の八幡神社・おしょうでんさんの由来・川尻の五輪塔・夜泣きに利く墓
地名に関するもの (10)	坂州・大用知・木頭・木頭名・高泉寺・沢谷・当山・川成・見堂谷・来づや田尾
水に関するもの (6)	みや女淵・千本滝・嫁滝・こうもり淵・竜権淵と雨乞い・関伽井の水
旧家に関するもの (4)	池田家と井内家・おかしら湯浅家・高泉の田中家・沢谷の齋城家
妖怪・変化に関するもの (11)	じぞう橋の怪・大人山・オギャナキ・オギャナキのおこり・高入道・向江谷のたぬき・一つ目の化物・三人坊主・ケヤキ淵・砂まき狸・火の玉
その他に関するもの (4)	川成の木地屋・坂州の舞台・横谷の七人塚・黒滝山

\* 1 鳴門市撫養町立岩字七枚124

\* 2 徳島市住吉1丁目9-29

### 3. 木沢村の伝説の特色

前記一覧表などより木沢村の伝説の特色を述べてみたい。その総数は80あまりとなっており、険しい山間生活を反映した多くの伝説がある。その特色として、第一に平家伝説が多いことである。県下の山間部にはどこも平家落人伝説があるが、木沢村は特に多いようで、平家伝説では全国的に有名な祖谷山地方に次いで多いようである。祖谷山のように特定の人物に関するものでなく、落人がやってきて開発したという話である。これは境を接している祖谷の影響もあると考えられる。相生・上那賀など仁宇谷の他町村にも平家伝説はあるが、それほど多くはない。

次は表1にみるように、社寺・神仏や弘法大師に関する伝説が多い。これは木沢村の人々の信仰心の深さを現しているものであろうが、四国霊場21番札所太竜寺が近くにあり、その奥の院黒滝寺があることが大いに関係しているようである。次いで動物に関してであるが、阿波は狸の国、狸の話は何処もたくさん伝えられているが、キツネに関しては殆どない。木沢にはキツネがすんでいたという、キツネの話があったが、これは珍しいものである。それと、山村に多い大蛇の伝説は殆ど聞かれなかったことも特色として加えたい。

紙面の都合で、集めた多くの伝説は紹介できないが、その一部の平家伝説を紹介したい。

### 4. 木沢村の平家伝説

#### ○大用知の落人

平家の落人の一人が、大用知の上流井堀の奥に住んでいた。そのころ、このあたり一帯の落人狩りをつとめる阿波山岳武士がいた。平家の落人は人数も少なく、あちこちに散らばって住んでいた。

ある時、大用知へ仕事にきた寺谷の人が、大用地谷の上流から野菜くずが流れてきたので不審をいだき、井堀の奥まで行ってみると、一人の落人が住んでいた。落人は絶対人に言わないで欲しいと頼んでいたが、源氏方の人が寺谷にいたので密告し、落人は殺されてしまった。その後、寺谷の人が井堀へ行くと、いろいろと災難が起り、谷の奥へ入ることができなくなった。これは落人のたたり間違

ないと、井堀に祠を建てて手厚くお祭りしたといわれる。祠は現在も残されている。（『木沢村誌』）

#### ○鎗<sup>やり</sup>かけと平家平

屋島の合戦に敗れた平家の一門は、井川町井内から西祖谷山村小祖谷をへて東祖谷山村に隠れ住んだといわれるが、更に一部の人々は剣山を越えて、岩倉部落にたどり着き、この部落を開拓し、その祖先となった。そこに「平家平」という山があるのは、落人がしばしば登った場所だから名づけられたものだといわれている。「槍かけ」の地名は、祖谷から剣山にきた落人が、槍戸川の下流にきて川を渡るとき、岩と岩の間の最も狭い場所に槍をかけて、対岸に渡ったので名づけられたのであろうといわれる。

（植田栄さん談74歳）

#### ○西山家の開けずの櫃<sup>ひつ</sup>

岩倉に住み着いた平家の落人の子孫といわれる西山家の本家には、開けずの間というのがあって、女人禁制とされていた。何時の時代か、この室にあった秘密の品々を一つの櫃に納め、何事があっても開けてはならない「開けずの櫃」として代々受け継がれてきた。

また、門の端に一本の柿の老木がある。石垣の間に生えるこの柿の木は、落人がこの地に住み着いた時、その子供が干し柿を食べて、その捨てた種から生育したものであるという言い伝えもある。この柿の木は何十年経っても少しも太らず、春には若葉が生い茂り、秋には真っ赤な実がたわわになるという不思議な木であるといわれている。

（西山房行さん談76歳）

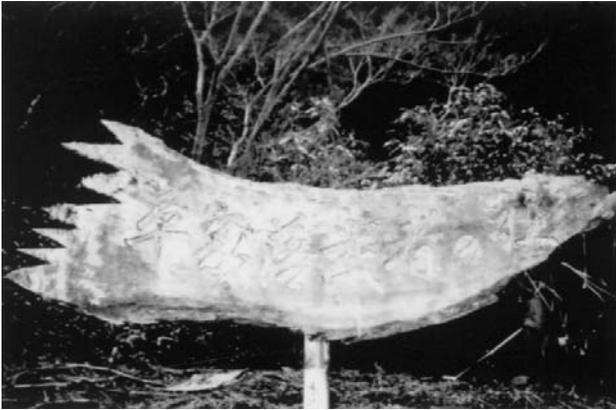
#### ○岩倉部落の起源

屋島の合戦に敗れた平家の一門は、祖谷山から岩倉・川成部落にも逃げてきた。岩倉部落開拓の先祖は、西山家の先祖といわれ、今も本家と呼ばれていて、西山家の小宮には鎧の手甲をおまつりしてある。この手甲は祖先が合戦のとき使ったものといわれ、長い年月のため布の部分は腐り、鉄の部分だけは原型をとどめている。

西山家からその後分家した家を母屋株といい、後藤株、新居屋（藤上家）株、東山株の三つに分かれている。それに本家の西山株を加えた4株が母屋株で、各株5～6家で構成されていた。それらの家に

は大小の刀が保存されていたが、今は見当たらない。

(西山房行さん談76歳)



○<sup>かけばん</sup>掛盤のいわれ

平家の落人が逃れるとき、帝の「懸盤」(食器を載せる道具)を捧持していた「小膳番」が当地を通過中、疲労のため死去したので、郷土の森に葬ったと伝えられる。その霊の冥福を祈って「懸盤村」と名づけたと伝える。それが明治維新の変動期に「懸盤」が「掛盤」になったそうである。(『木沢村誌』)

○一本杉

掛盤の五倍木在所から少し上がった山の中に、「一本杉」と呼ばれる周り7.5mもある大きな杉の木が生えている。その杉の木の下に祠があって、昔の鏡らしい丸いものが納められて祀られている。このことについて部落では古くから次のような話が伝えられている。昔、源氏と平氏が戦った時、戦に負けた平氏の一人の武士が、この地に逃げてきて、杉の木の下的小屋に隠れ住んでいた。月日がたつて源氏の武士が在所のある家へきて、「平家の武士は来ているか」と聞いた。その家の人は心ならずもせかれるままに、一本杉の小屋に隠れ住んでいることを知らせた。やがて源氏の武士は大勢の家来をつれてきて、小屋を取り囲み逃げ場を失った平家の武士が、屋根を切り開いて必死に逃げ出すとき、身につけていた物を落として、瀬津の六郎山まで落ち延びたがとうとう討たれた。

そのことがあって以来、五倍木在所に不幸がおきる様になったので、部落の人は一本杉の下に祠をこしらえて、落としたものをご神体として平家の武士の霊を祀るようになった。

○川成部落の開祖

川成部落は岩倉部落と共に、祖谷山から剣山を経て落ち延びてきた平家の落人である、前田・大森の2家によって開かれたといわれ、両家は昔から家の守り神として夫々若宮大権現を家の近くに祀っており、それが先祖であると伝えられている。

(『木沢村誌』)

○七人塚

川成部落の入り口のあるよしの瀬に現存する七人塚は、源氏の追っ手が葬られた墓であるという言い伝えがある。やはりこのあたりには平家の落人が住んでいたようである。

(『木沢村誌』)

○とちの菜の怪異

沢谷に劔山と呼ばれ、村の氏神として祀られているのは、平家にゆかりのある、あるやんごとなきお方であるといわれ、今は唯、墓標といわれる箇所のみ残っており、それを包んだ鬱蒼たる森林を村人は「王ヶ森」とか「妃の森」と呼んでいる。

寿永(1182~85年)の昔、平氏の一族が西海に滅んで思い思いに落ち延びて行った人々の中に、一人の姫君は道なき道を踏み分けてようやく沢谷まで逃れてきたが、病のためここで死去した。その後を慕ってきた乳人と見える婦人は、谷川の岸に立って苦しかった過去を思い浮かべて、ふと目を落とすと、清水の面に浮かんで流れる一枚の青菜をみた。それは土地の人が「とち菜」とよんでいる、山野に自生する「オトコヘシ」の葉であったので、川の奥に人家のあること知った。それをたよりに疲れきった足を引きずりながらも、谷を伝って登ると、一軒の人家があった。そこでは夕餉の支度(ゆうげ)に今しもとち菜を煮ているところであって、空腹に耐えかねて一碗の恵みを乞うたが、家の主は素っ気なく振り切ってしまった。婦人は里人の無情をうらみつつ、森に入って、飢え死にした。このことがあってからこの家では、女の恨みが祟ってか、とち菜を食うと必ず腹痛を起こした。代が変わり人が変わっても変らなかった。その家は明治になって跡が絶え、その後へ勝浦郡から株を買って移り住んだ家も、別に関係あるまいと一度とち菜を食ったところ、家族一同が激しい腹痛をおこしたので、それ以来、とち菜には見向き

もしないそうである。 (『木沢村誌』)

○ウツゲの谷

加州の向江谷の近くにウツゲの谷というのがあって、その谷を挟んで道が通っていて、その道の脇に水が溜まっているところがある。むかしそこで平家の落人が血のついた刀を洗ったそうで、その水を飲むと腹が痛くなるから飲まれんぞといわれた。

(『木沢村の民話と伝説』)

○<sup>とち</sup>栩平の始まり

昔、平家の落人の侍が逃げてきていたが、やがて出羽の在所の女と知り合い住み着いたそうである。そこには大きい栩の木があって、それで「栩平」と名付けたということである。その侍は生活していて気にいらぬ人は鉄砲で撃ち殺したという。それで殺された人の墓がいくつもあるそうである。栩平の草分けの人は人を殺めるのが苦にならない人であったようである。(その頃はまだ鉄砲はなかったので弓矢であろうともいわれる。)

(『木沢村の民話と伝説』)

## 5. 伝説などを語ってくれた人達 (敬称略)

山本 重行 (昭和5年生)

井地岡武春 (昭和7年生)

仁義 博文 (昭和11年生)

植田 栄 (昭和5年生)

西山 房行 (昭和3年生)

藤上 武雄 (大正13年生)

東山ミキ子 (昭和17年生)

## 文 献

木沢村誌編集委員会 (1976) : 『木沢村誌』 徳島県那賀郡木沢村。

木沢村婦人会 (1992) : 『木沢村の民話と伝説』 木沢村教育委員会。

徳島県老人クラブ連合会 (1988) : 『阿波の語りべ』 徳島県老人クラブ連合会。

福田晃編 (1982) : 『日本伝説大系12巻』 みずうみ書房。

藤沢衛彦著 (1919) : 『日本伝説叢書阿波の巻』 日本伝説叢書刊行会。

横山春陽著 (1980) : 『阿波伝説集』 歴史図書社。

横山春茂 (1956) : 『石が語る阿波』 徳島新聞出版部。